



# さらしな の 里



第 12号

「友の会」だより

2005・春



姨捨孝子観音を前に御詠歌を唱える羽尾の女性たち  
(大橋静雄さん撮影)

## 春とともに親孝行奉賛

一九五六年に発表された深沢七郎作「榎山節考」。これが舞台劇や映画(木下恵介監督)にもなり反響を呼んだ。物語は姨捨伝説を題材とし、掟として七十歳を迎えた親は冬、息子に連れられ榎山へ捨てられる。村は食料を盗んだものは生き埋め、三男以下の男は結婚の禁止…と貧しい。

一方、地元の姨捨伝説は、飢饉の年に領主の命令で老人を山に捨てる話だが、ひそかに老母を連れ帰り、かくまった息子が他国より無理難題受けた領主を、老母の知恵で救った。領主は親を大切にしたい息子を大いに誉め、以後老人を大変大事にした。

小説や映画で、世間は更級の里を親不孝な土地柄と誤解した向きがあった。このため在京更級会の人々は「誤りを是正し、永く孝子の誉れを残したい」と六〇年、羽尾出身である北村敬三氏を代表に姨捨孝子観音協会奉賛会を結成。旧戸倉町(現千曲市)羽尾五区郷嶺山頂に姨捨孝子観音を建立し地元へ寄付された。

作者は日本彫刻会委員長、日展事務局長の小森邦夫氏。祭事は毎年四月十五日、羽尾四区、五区の春祭りに合わせ七年より地元奉賛会によつて行われている。当日は明徳寺より住職を先頭に区議員の行列が郷嶺山に向かう。到着後、御詠歌、読経と進み、最後に親孝行を奉賛し祝宴が続く。大谷秀志先生の著書「鐵(くろがね)」を参考にしました。  
(大橋静雄)

さらしなの里歴史資料館主催の春の講演会は三月二十一日、東京都立大学(現首都大学東京)の堀信行教授から「地球に生きる」というタイトルで、アフリカ・スーダンの農耕民族の収穫祭についてお話をうかがいました。

### 「土」が命をつなぐ

堀さんは、人間の暮らしと土地柄や伝統文化の関係などを研究する「環境地理学」の第一人者で、「ワルキ」という民族グループの



自然観や世界観をスライドをたくさん使いながらお話しくださいました。命をつないでいく舞台として「土」「大地」が何よりも大切なものであることを親しみのある口調で指摘されました。「縄文まつり」も収穫祭であることを思い出しました。

.....

TBSのテレビ番組「新春!途中下車の旅」の収録に、友の会も協力しました。さらしなの里歴史資料館を訪ねた、モト冬樹さんらタレント四人の「案内役」を上水清さんがしました。モトさんらは縄文服を実際に着て、弓や斧を持って体験パークに出で、火起こしも体験しました。その後、羽尾の年配のご婦人をつくる「更級オカリナの会」のメンバー約十人が、「故郷」を演



### 上水清さんが案内役

奏しました。番組は、戸倉上山田温泉や坂井村のやしまつくりなど、さらしなの里の周辺の名産や名所も合わせ、今年一月三日に放送されました。

.....

### 踊りが新たに加わる

第十二回さらしなの里縄文まつりは昨年十月三十一日、開催され、四千五百人余りが来場した。今回はアフリカのジャンベ太鼓が独立した演奏となり、新たに踊りも加わった。参加した子どもたちは練習の初めは、照れもあったようだが、本番では練習の成果を見事に発揮して、堂々と演奏し踊っていた。どの子も輝いて見えた。



縄文太鼓の演奏をバックにした広場での踊りは言うなれば、まつりの締め。スタツフが多い踊りの輪の中に来場者をもっと引き込めれば、フィナーレにふさわしく、さらに盛り上がるのではないだろうか。参加してこそそのまつりである、と縄文まつりを位置づけてもらえれば踊りの参加者も増

### 当地で日本ナイル・エチオピア学会

第一部は、自然に育まれる子どもたちの世界について京都大学名誉教授の河合雅雄先生と京都大学大学院教授の福井勝義先生が対談形式で講演。第二部はエジプトと千曲川流域それぞれの古代文化について三人の研究者が報告した。



第一部で特に印象に残った言葉があった。日本の子どもとボルネオの子どもをジャングルで自然体験させている河合先生の「日本の子どもは子どもたちの世界や自然の世界に溶け込むまでに時間がかかり、どこか親の存在を気にしている」という言葉だ。現代日本人の実態を的確に指摘すると同時に今後の日本人の生き方に見直しを迫るものだった。

.....

えるのかもしれない。(清水理恵)

.....

四月十五日から十七日にかけて、千曲市とさらしなの里歴史資料館、さらしなの里友の会が共同後援し、日本ナイル・エチオピア学会の第十四回学術大会が戸倉創造館で開催された。十六日は「未来へつなぐ川―問われる文化の創造と継承」と題した千曲川とナイル川に

(翠川泰弘)



## 練習はウソをつかない

還暦を過ぎた今、我々の育った時代をナツカシク思います。勉強勉強と強制されることもなく、毎日体を動かしての遊びが主体であり、川、池、山、田、畑など自然すべてが遊び場であり、運動場でした。しかも、一年中、体を動かして遊んでいたもので、我々の世代は自然に足腰も鍛えられ、今思えばありがたいことです。

私が長い距離を初めて走ったのは小学校六年生の授業のときでした。現在の更級小学校の校舎が建っているところが当時は校庭であり、そこから県道を上って浦島屋を左折し、仙石の火の見を左折し校庭に帰る千五百坪のコースでした。舗装されていない道路をはだして走るので、それが当たってチクチクと痛い思いをしながら、前方と足元を見ながら走ったものでした。

何回走っても一番にはなれず、あるときは頑張りすぎてゴール後、倒れてしまいました。教壇の上で同級生が下敷きで一生懸命煽って、体を冷やしてもらった記

憶が残っています。

人生の中で人との出会いというものに不思議な縁を感じます。高校の陸上部の先輩に入部を勧誘されなければ、また他

ーハイ、国体、各種大会が懐かしく蘇ってきます。

長距離は誰でも早く走れるようになるものであり、また練習はウソをつかないとい

## はだして走った更級小の長距離

いうことです。走った距離は記録更新につながり、達成感・充実感となります。夢や目標を

持ち、その達成のために困難を乗り越え、内面的成長と競技力の向上につながる精神的な強さが培われ、強いライフスキルが身につくものと思います。

また選手時代、陸上一筋に打ち込めなかった思いと夢を次の世代に託し選手の育成強化にかかわり、選手が心身ともに成長していく姿を見るのが楽しみです。

今までに多くの感動、感激を味わえたこと、ここまで続けることができたのは多くの皆様に支えられたのことに感謝に耐えません。そしてたかがカケッコされどカケッコであり、奥が深い感じがいたします。

(都道府県対抗男子駅伝長野チーム監督・西沢民雄Ⅱ千曲市仙石在住)



の高校へ行っていたら、走ることはない人生を送っていたかもしれませぬ。今は先輩に感謝しています。

入部後、競技者として、また選手の育成強化を含め、五十年近く陸上競技にかかわる人生となり、全国高校駅伝、インタ

# おらほの冠着 ⑫

昨年十月二十四日、千曲市商工会議所の主催で、冠着山登山が行われた。

戸倉、上山田両町と更埴市の合併で誕生した新しい市のシンボルの一つに冠

着山を取り上げようと、さまざまな文化団体に声をかけ、この山の伝説にちなんで「葉の山」として、みなで登ろうということになった。

## 「葉の山」で新たな出発

葉とは「枝折り」のこと。姨捨伝説物語では、背負われた老母は、息子が帰る道に迷わないように、小枝を折って道に落とし、道しるべにしたと  
言う。息子はこれを見て、とても捨てる気になんかなれず、里に連れ戻したというお話。

その話にちなんで冠着山を「葉の山」と



名づけ、さらに千曲市を「葉の故郷」と位置づけようという構想。

冠着山の新しい一面の発掘という意味があつて楽しい企画だ。今後どういふふう  
に発展させていくか興味あることである。

当日は天気もよく、大勢の人が大池に

集合し、山道を歩いて登山した。森林インストラクターを先頭に途中で植物のお話があつたり、頂上では、これまで冠着へ千回も登つたなどという猛者（旧戸倉町磯部の人）のお話を聞いたり、旧更埴市植生のご婦人たちの朗読あり、インターチェンジを眺めての説明もあつた。わがほうでは、野本洋子さん率いる更級小学校児童たちが「羽尾の民話」を披露し、楽しい集会となつた。

冠着山が千曲市の一員として認められて市民に知られるきっかけになつたような期待を得た一日であつた。

（塚田哲男）

〔編集後記〕 今号は、さらしなの里に関する

ニュース（二ページ目）が盛りだくさんです。ビデオに録画されているものも、さらしなの里歴史資料館にあります。

姨捨孝子観音のある郷嶺山には、更級や姨捨に関する句歌碑がたくさんあります。八幡の長楽寺とともに観月の好スポットです。孝子観音から少し離れたところには、老人の知恵の大事さをユニークな演出で説いた大きな石碑が立っています。

駅伝の長野チームを優秀な成績に導く西沢民雄さんの監督としての采配が、よく話題になつているため、原稿をお願いしました。駅伝の写真はお持ちでないというので、ボランティアで運営役を担っている更埴小学生陸上競技大会でのご様子を撮影しました。

「おらほの冠着」の写真は、「葉の山」登山を企画した千曲市商工会議所広報委員会の馬場條さんからお借りしました。今年も九月十七日に「葉の故郷」関連のイベントを計画しているそうです。

さらしなの里友の会事務局

〒389-0812

長野県千曲市大字羽尾二四七の一

さらしなの里歴史資料館内

電話026(276)7511

FAX026(261)4161